

フィリピン：ボホール灌漑事業

事業実績に関する問題整理と日本政府・JBIC に求められる対応

お粗末な事業実績（水源の確保に関する懸念）

事業・ダム	目標灌漑面積（ha）	実績（ha）
ボホール灌漑事業（ ）＝マリナオダム	4,960	2762.58
ボホール灌漑事業（ ）＝バヨガンダム	4,140	建設中
カパヤス灌漑施設建設設計画＝カパヤスダム	750(バヨガンダム建設後 1,160)	539

ボホール灌漑事業（ ）マリナオダムによる灌漑・作付面積（ヘクタール）

年	時期	灌漑・作付面積
1997	乾季	3842.61
1998	雨季	1861.16
	乾季	0（エルニーニョ現象のため）
1999	雨季	3133.12
	乾季	2731.62
2000	雨季	3155.86
	乾季	3429.62
2001	雨季	3261.31
	乾季	3093.25
2002	雨季	3210.14
	乾季	2937.62
2003	雨季	2777.03
	乾季	2796.42
2004	雨季	2825.33
	乾季	2383.61
平均		2762.58
不足		4960 - 2762.58 = 2197.42 ha

（フィリピン灌漑庁のデータをもとに作成）

あくまで作付面積なので、**収穫時に水不足があれば、収穫面積はさらに減少する**

問題提示：

バヨガンダムは、水源の約60%を依存するマリナオダムからの余剰水を実際に確保できるのか。

JBICの認識：

- ・1999年12月28日にフェーズ への融資契約を決定した後に、詳細設計調査（D/D）を行ない、事業の実行可能性について再度検証したので問題ないとしている。
- ・2000年3月のJBICによるフェーズ の事後評価によれば、灌漑面積の実績は4,973ヘクタールとされている。
(http://www.jbic.go.jp/japanese/oec/post/2000/pdf/jigo00_32j.pdf)

今後、日本政府・JBICに求められる対応

フェーズ およびカパヤス建設設計画と同様の問題を地元で引き起こし、新たな無駄なダム（フェーズ ）を作ってしまう可能性がある。その前に、以下の対応をとるべきである。

- 1) 詳細設計調査を含む全灌漑システムの水源確保に関するデータ・資料の公開
- 2) フェーズ およびカパヤス灌漑計画に見られる問題点の検証（事業実績の検証、灌漑面積の検証、および、事業前後での受益農民の生活水準の比較検証などを含む）その検証結果の公開、および、問題解決への適切な対応
- 3) フェーズ1およびカパヤス灌漑計画の問題検証を踏まえた上でのフェーズ における適切な対応（フェーズ およびカパヤス灌漑計画の問題検証を終えて、適切な対応によって問題解決が図られるまでのフェーズ への融資凍結）